

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 文学館の「図書館的機能」の形態の整理および文学館の分類に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小国, 七慧 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001515">https://doi.org/10.57529/00001515</a>

# 文学館の「図書館的機能」の形態の整理および文学館の分類に関する一考察

小国七慧

## 論文要旨

今日の<sup>ぶんがくかんけんきゅう</sup>文学館研究において文学館は、「博物館でも図書館でもない、既存の機関とは一線を画する新たな一機関」と認識されており、その論拠として「<sup>としょかんてききのう</sup>図書館的機能」の存在が重要な要素とされている。しかしこれらの機能の役割に関する整理は不十分であり、そのため、文学館自体の位置付けを曖昧にする一因となっている。

文学館の位置付けや機能を捉えていくためには、まずはこの「図書館的機能」の実態を把握することが必要である。そこで論者は2018年9月から12月にかけて、文学館の「図書館的機能」を担っている活動である、図書資料の閲覧提供活動に関する実態調査を実施した。本論はその結果から、「図書館的機能」の目的に着目し、文学館の分類として、<sup>けんきゅうてんがた</sup>「研究拠点型」、<sup>きょういくふきゅうがた</sup>「教育普及型」、<sup>ぶんがくしゃけんしょうがた</sup>「文学(者)顕彰型」の3つの形態を見出すことができた。さらに、このことによって、文学館の機能や位置付けを捉える際の新たな一視点を提示することも可能となった。

キーワード 図書館的機能 文学館研究 研究拠点志向 教育普及志向 文学(者)顕彰志向

## はじめに

博物館学の領域において文学館は、『博物館学史研究事典』に「文学作品およびその作家を対象とする博物館と考えられている」<sup>1</sup>と記されているように、博物館の一分類として認識されている。しかし、文学館関係者や文学館研究者らからは、文学館を、「博物館的機能」と「図書館的機能」を併せ持った、「博物館でも図書館でもない、既存の機関とは一線を画する新たな一機関」として捉えようとする見解が示されている。また、この見解においては、特に文学館の「図書館的機能」の存在が、重要な論拠となっている。しかし文学館機能論においては、この「図書館的機能」に関する解釈は定まっていない状況にある。このことは、文学館自体を定義しようとする際においても、博物館の一分類とする

見解、博物館と図書館の機能を持ち合わせた、新たな一機関と位置付けようとする見解など統一された見解が示されない状態につながっている。

以上の現状から、文学館における「図書館的機能」の整理を行い、その機能の役割や目的に関して検証していくことが、文学館の位置付けを明確にするためには、必要不可欠であると判断した。そこで、論者は、2018年9月から同年12月にかけて、全国208の文学館（木原直彦「全国文学館等一覧 2017年改訂版」<sup>2</sup>の中から論者が基準を設定し、その基準に適合した文学館を抽出した。詳細は後述する。）に対して「図書館的機能」に関する実態調査を実施した。本論はその調査結果に基づき、「図書館的機能」の再検討を行うことによって、文学館の位置付けを考察する際の新たな視点をもたらすことを目的とする。

## 1. 文学館の「図書館的機能」の認識

### 1-1. 文学館の位置付けに関する認識について

文学館とはどのような機関であるのか。全国文学館協議会会則においては、「わが国の文学に関する文献・資料の収集・保管、閲覧、展示等の事業を行っている、またはこうした事業を行おうとしている、施設または組織（以下「文学館」という）」<sup>3</sup>と定義されている。そもそも我が国において、「文学館」の名称の機関が誕生したのは、1967年の日本近代文学館開館時のことなのだが、先述の全国文学館協議会の会則が示すような、今日の文学館研究において文学館とされる機関は、機関の名称に「文学館」を用いているものだけでなく、日本近代文学館の開館以前からすでに設立がみられていた文学者の個人記念館や、図書館の類縁関係にあるとされる「文庫」、その他に「文学博物館」、「文学資料館」、「文学ミュージアム」などの多様な名称や形態の機関が含まれている。

こうした多様な形態の機関がその範囲に含まれる文学館に関して、博物館学においては、『博物館学史研究事典』に「文学作品およびその作家を対象とする博物館と考えられている」<sup>4</sup>と記されているように、博物館の一分類として認識されている。一方で、1995年の全国文学館協議会の設立を契機として本格的に着手されるようになった文学館研究の領域においては、文学館を、「博物館的機能」と「図書館的機能」を併せ持った機関と捉えた上で、博物館でも図書館でもない、既存の機関とは一線を画する新たな一機関として位置付けていくとする見解が示されている。例えば、日本現代詩歌文学館の豊泉豪は、1996年3月に開催された第4回目の全国文学館協議会幹事会において以下のように発言している。

今後この協議会において、博物館でも図書館でもない、「文学館」という大きな枠組みを作っていくのだとすれば、博物館や図書館の理念がそれぞれ博物館法、図書館

法によって定められているのと同様に、(文学館法の制定は望めないまでも)文学館の理念を明確にすることがその手始めの仕事となるでしょう。<sup>5</sup>

ここで、「今後、博物館でも図書館でもない、「文学館」という大きな枠組みを作っていくのだとすれば」の部分に示されているように、同協議会においては発足当初から文学館を、博物館および図書館などの既存の機関とは別個の新たな一組織として位置づけようとする見方が示されていた。また、本協議会においては、こうした見解とともに、発足当初から文学館の機能として、上述の「博物館的機能」と「図書館的機能」の2つの存在が指摘されている。<sup>6</sup> 先に引用した全国文学館協議会会則の中では、文学館の活動として、資料の収集、閲覧、保存、展示の4つが挙げられていたが、「博物館的機能」とはこのうちの資料の展示活動が担っているものであり、他方、「図書館的機能」は、資料の閲覧活動が担っているものと、文学館研究の領域においては解釈されている。<sup>7</sup> なお、収集、保存に関してはどちらの機能もが担っていると捉えられるため、「博物館的機能」と「図書館的機能」のいずれかに分類するのか、あるいは両方を兼ねているとするのか、明確な見解は示されていない。

また全国文学館協議会を離れた文学館研究の場においても、例えば図書館情報学者の岡野裕行が、「文学館は図書館としての機能と博物館としての機能の両方を有するが、そのいずれにも寄りすぎることはない中立的な立場である」<sup>8</sup>と述べているように、全国文学館協議会内での見解と同様に、文学館に対して「博物館的機能」と「図書館的機能」とを見出した上で、博物館と図書館のいずれにも分類されることのない、特殊な機関として位置付ける認識を示している。以上のように、文学館研究の領域においては、文学館の機能として、「博物館的機能」とともに「図書館的機能」を見出すことによって、博物館学における認識とは異なり、博物館として分類されることのない、「博物館兼図書館」という特殊な機関として位置づけようとする見解が示されているのである。

なお、制度的な視点からみると、文学館の中には博物館法上の登録施設や相当施設に指定されている機関や、日本博物館協会に属している機関も存在しており、これらは制度上は博物館の一分類であるといえる。また、学問領域的な観点では、前述のように、博物館学の分野においては、文学館は博物館の一分類として捉えられているのだが、一方で図書館情報学の分野では、岡野が『『図書館情報学用語辞典』には、2007年末に刊行された第3版に至っても文学館という用語は見出し語として取り上げられていない。』<sup>9</sup>と指摘しており、また論者が確認したところ、最新の第4版<sup>10</sup>においてもなお「文学館」の見出し語の掲載は認められなかったことから、文学館はその学問の対象とされていないといえる。以上の制度的な位置づけや、博物館学、図書館情報学における認識をみると、文学館は博

物館の一分類として捉えられているといえる。

## 1-2. 文学館における「図書館的機能」の重要性

そもそも、前述のように文学館の機能として、「博物館的機能」と「図書館的機能」の2点が認められるようになったのは、日本近代文学館の設立を契機としている。同館は、関東大震災や戦災、戦後の古書市場における文学関係資料の売買などによって散逸の危機にあった近代文学関係諸資料の保存と、それら資料の学術研究者への閲覧提供を目的に設立されたのだが、その設立過程であった1965年8月に発行された、『日本近代文学館ニュース』第7号においては同館の機能について以下のように述べられている。

第一は、日本の近代文学および現代文学に関するあらゆる資料を散逸させないように蒐集し保存する、つまり完全な保存機能である。

第二は、それらの資料を一般の利用に供し、日本文学に関する種々の研究に資する、いわゆる専門図書館としてのサービス機能である。

第三は、講演会、講座、展示などにより日本文学の振興をはかる、文学センター的機能である。<sup>11</sup>

上掲においては同館の機能として、①「保存機能」、②「専門図書館としてのサービス機能」、③「文学センター的機能」の3つが挙げられているが、このうちの②は今日の文学館研究における「図書館的機能」にあたり、また③は「博物館的機能」にあたる機能といえよう。ここでは「図書館的機能」および「博物館的機能」という用語は用いられていないが、設立運動関係者であった伊藤整が、同館の開館に先立つ1962年に、「『日本近代文学館』というのは、言わば、近代文学の総括的な博物館兼図書館である」<sup>12</sup>と述べていることから、同館は博物館的な側面と図書館的な側面を併せ持った機関として認識されたといえる。なお、日本近代文学館の開館以前に既に設立されていた文学者の個人記念館において、「図書館的機能」を有している機関は確認されない。これらの他にも、日本近代文学館開館直後の1968年に、当時の同館職員の大久保乙彦は『図書館雑誌』昭和43年2月号<sup>13</sup>において、日本近代文学館の位置づけについて以下のように述べている。

収蔵の範囲を主としてわが国明治以降の文学・演劇および類縁の科学資料に限っている点では、専門図書館的である。(中略)原則として18歳以上の者なら差別なく利用できる点では、公共図書館的である。蒐集した資料をできるだけ原型を損なわずに保存しようとする姿勢からみれば、保存図書館的である。図書・雑誌のほか原稿・書簡・筆蹟・遺品などをも蒐集、整理、保管する点では、博物館的一面をもつともいえる。<sup>14</sup>

この大久保の記述においてもまた、図書館的な側面と博物館的な側面を視点として文学館を捉えており、同館において「図書館的機能」と「博物館的機能」とが見出されていたことがわかる。

そして、この認識が今日の文学館研究にみられるような、文学館を博物館には分類されない独自の特殊な機関とする見解につながっていくこととなる。すなわち、この2つの機能の存在——特に、「博物館的機能」とともに「図書館的機能」を有していること——が文学館の独自性を生み、文学館は単純に博物館には分類されない機関とする見解へと至っているのである。文学館にとっては、「図書館的機能」こそが、博物館の枠組みから離れ、文学館を文学館として捉えることを可能とする重要な要素となっているといえる。

### 1-3. 「図書館的機能」の重要視度合いをめぐる3つの見解とその問題点

前項で指摘したように、文学館においては2つの機能のうち、特に「図書館的機能」の存在が、文学館を文学館として独立した機関と認識することを可能とする重要な要素となっている。そのため文学館研究においても「図書館的機能」に関しては議論の俎上に載ることが多いのだが、その役割に関する見解は論者によって様々であり、そうした議論の整理が不十分であるために、文学館自体の定義を曖昧なものにする一因となっている。

たとえば、日本近代文学館元理事長の中村稔は、「図書館的機能」が文学館において最も尊重されるべき重要な機能にあるとの見解を、以下のように述べている。

文学館の本来の使命は、文学資料、すなわち、肉筆原稿、初出誌、初版本、推敲をへた後日の刊本、日記、書簡、創作ノート、書入れ本その他の蔵書、さらに研究書等をひろく収集、保存、整理し、研究者などの閲覧に供することである。きわめて限られた少数の読者のための図書館的機能を果たすことが本来、文学館の役割である。<sup>15</sup>

中村は、文学館の活動の中でも閲覧提供活動こそが文学館の使命を果たすものであると主張した上で、「限られた少数の読者のための図書館的機能」すなわち、「図書館的機能」を重要視する姿勢を示している。

中村がこうした見解を示す背景には、日本近代文学館の設立経緯が関係しているものと考えられる。中村の同館の設立経緯に対する認識は、2005年3月に実施された全国文学館協議会の「文学館の総務に関する共同討議（第3回）」における発言からうかがうことができる。

この日本近代文学館は元来、専門図書館として散逸しがちな資料の散逸を防ぐ。そのために初版本、あるいは散逸しがちな、それこそ初出誌のたぐい、同人誌のたぐい、それから肉筆資料等を保存して保管して研究者等の閲覧に供するというのが本来の目

的でスタートしたわけです。<sup>16</sup>

前項でも取り上げたように、日本近代文学館は文学資料の散逸を防止する保存庫的な役割を果たすことを目的としていたのだが、それと同時に、文学研究者に対して必要な資料の閲覧提供を行う、「専門図書館」となることも目指して設立された機関であった。そのため、前項で指摘した、「図書館的機能」として考えられる、「専門図書館としてのサービス機能」と、「博物館的機能」として考えられる、「文学センター的機能」の両方を同館の機能として掲げてはいても、開館当初から資料の閲覧提供を重要な活動のひとつとして位置付け、重点が置かれていた。こうした背景を強く意識していたことが、中村の見解に関係していると考えられる。

一方で、こうした中村の見解とは異なり、論文発表時に世田谷文学館学芸員であった生田美秋は、文学館は各館の収集資料の主題によって「専門文学館」、「総合文学館」、「個人記念館」の3つに分類できること<sup>17</sup>を示した上で、「日本近代文学館、俳句文学館などの専門文学館が資料の収集、保管など図書館的機能を重視するのに対し、地域の総合文学館は資料の収集、保管、調査研究と同じウエイトで展覧会事業や教育普及事業をとらえ実践する「博物館としての文学館」を志向している」<sup>18</sup>と述べており、中村とは対照的に、文学館の活動において、「図書館的機能」以上に「博物館的機能」を重視する姿勢を示している。この生田の見解もまた、自身が「総合文学館」に属する立場にあったことが強く影響していると考えられる。

さらには、上述の中村とも、生田とも異なって、「博物館的機能」と「図書館的機能」を平等に果たしていくべきだとする見解を、日本現代詩歌文学館の豊泉豪は以下のように述べている。

専門図書館と博物館、この文学館が持つ二つの機能を過不足無く両立させることは非常に難しいわけですが、だからと言って私は二つの機能は決して相反するものではないと思います。現実的にはそれがほとんど不可能とさえ思われるとしても、一方が他方にリンクし、フィードバックされるような形態はやはり理想として捨てずに持っていたいと思います。<sup>19</sup>

豊泉は、文学館の2つの機能が両立することの難しさを示す一方で、それぞれがつながり合い、両機能が等しく果たされることを理想とする見解を提示している。

以上の3者の見解に示されるように、文学館の「図書館的機能」については、それに重点を置くべきだとする見解、反対に、「博物館的機能」の方を重視すべきだとする見解、そして「博物館的機能」とともに双方を等しく両立させていくべきだとする見解、の3つの主張が示されている。これら3つの見解においては、いずれも、文学館は「博物館的機

能」とともに「図書館的機能」を併せ持った機関であるとする前提は共通してはいるものの、重点を置く機能に関する認識に隔たりがみられる。こうした生田の指摘や、前述の中村、豊泉の見解ののちも、文学館研究においては、「図書館的機能」のあり方に関して、その整理・分析は進んでおらず、今日においても統一された見解は示されていない。このことは、文学館の位置付けをめぐる議論において一定の見解が示されない要因ともなっている。

例えば駒見和夫は、「文学系博物館小考」<sup>20</sup>において文学館を「文学・文芸の作品や作者、研究者をテーマとして、関連する資料を収集・保管・研究するとともに公衆に対しそれを公開する博物館」<sup>21</sup>と定義しており、文学館に対して「図書館的機能」ではなく、「博物館的機能」を見いだすことによって、博物館と同一の機能をもつ機関として捉える見解を示している。一方で岡野は、「文学館の検索システムの現状と課題」<sup>22</sup>において、「文学館という機関は日本近代文学研究者に対する専門図書館としての役割を担っている」<sup>23</sup>と述べることで、文学館の「図書館的機能」を強く見出し、そのことによって、文学館を図書館と博物館の融合した機関として捉える見解を示している。このように、「図書館的機能」に対する認識が定まっていないことは、文学館自体を定義しようとする際にも、博物館の一分類とする見解、博物館と図書館の機能を持ち合わせた、新たな一機関と位置付けようとする見解などが示される背景となっており、統一された解釈を見出すことができない状態を招いてしまっている。

また上述の議論だけでなく、先に指摘したように文学館研究においては、博物館の機能と図書館の機能が融合した新たな機関として文学館を捉えようとする認識が全国文学館協議会を中心として共有されているが、一方でこうした文学館研究者らの意図とは反対に、例えば日本近代文学研究者の中沢弥は、「いくら図書資料が充実していても純粋な図書館とはことなり、また博物館でもないという文学館のあいまいさというものもあるようだ」<sup>24</sup>と指摘しているように、他の学問領域からは、博物館の延長線上にあるのか、図書館の延長線上にあるのか、あるいは全く別個の存在であるのかが曖昧な機関として捉えられている事例が多くみられる。

以上のように、文学館研究における「図書館的機能」に関する認識が整理されていないことは、文学館の位置付けをも曖昧なものとする状況となっているのであるが、それでは、実際に文学館において「図書館的機能」はどのようにな役割を担っているのだろうか。先の中村らの論考においては、いずれも論者らの属する文学館の領域からの見解が示されており、文学館全体としての「図書館的機能」の傾向を把握することが難しい。文学館の位置付けや機能を整理していくためには、まずは文学館の「図書館的機能」の現状を正し

く把握することが必要であると考え。

#### 1-4. 研究目的と調査の概要

##### 1-4-1. 研究目的

前述のように文学館の位置付けを整理していくためには、まずは文学館の「図書館的機能」の現状を把握することが必要である。前項で取り上げた中村らの各論考においては、論者らのそれぞれの立場から主張がなされており、文学館全体の動向に関しては特に触れられていなかった。文学館の位置付けを捉えるためには、実際の文学館活動における「図書館的機能」がどのような役割を担っているのか、その全体像を把握することが手始めの作業になるのと考え。具体的には、「図書館的機能」を担っているとされる文学館の図書資料の閲覧提供活動に関して調査分析することによって、それが達成できると考える。

そこで論者は、2018年9月から同年12月にかけて、全国208館の文学館（木原直彦「全国文学館等一覧 2017年改訂版」の中から論者が背呈した条件に適合した文学館を抽出した。詳細は後述する。）に対して、図書資料の閲覧提供活動の実態調査を行った。本論は、この調査に基づき、「図書館的機能」の整理と文学館機能の再検討を行うことによって、文学館の位置付けを考察するための新たな視点を提示することを目的とする。

##### 1-4-2. 文学館の「図書館的機能」の実態調査の概要

調査の実施にあたり、まずは対象とする機関の選定を行った。本章の第1項において述べたように、文学館とされる機関は広範にわたっており、例えば、文学館研究において最も参照されることの多い、木原直彦「全国文学館等一覧 2017年改訂版」<sup>25</sup>（以下、本論においては、「全国文学館等一覧」と呼称する）においては、約745館の機関が採録されているのだが同一覧は、「採録の範囲は、文学館・記念室・コーナー・文庫・旧居のほか、脚本家・美術家・作詞家・文筆家・思想家・歴史上の人物など近似の施設も含む」という注書きがあるように、「文学館」、「文学記念館」、「文学博物館」などの名称を冠した機関だけでなく、図書館内に併設された展示スペースや、「文庫」などの類縁的な機関、収蔵資料の一部に文学や文学者に関係する資料が含まれる歴史系博物館、さらには郷土資料の一部として文学資料を収蔵している図書館までもが含まれており、「全国文学館等一覧」という名称の通り、文学に関係する一次資料を収集している機関を総括的にまとめたものとなっており、ここに掲載されている機関＝文学館というわけではない。また、この他にも岡野が独自にまとめた「文学館一覧」<sup>26</sup>においては、前述の木原の調査結果の2006年版を参考にして763館の機関が掲載されているが、「文学の意味する領域をできる限り幅広く認

識していきたい」との意図から、「一般に文学という言葉から連想される純文学作家、大衆文学作家、児童文学作家、俳人、歌人などに関する資料だけではなく、映画関係者、マンガ家、作詞家などをも含めております。また、時代的にも近代・現代領域だけではなく、古典や近世などを含める形で幅広く一覧を整備しています。」との説明が添えられており、木原の一覧と同様に、文学に関係する資料を主題とする多様な機関が含まれていることから、ここに掲載されている機関もまた、それがすなわち文学館であるとするのは難しい。以上のように、文学館とされる機関は明確には規定されておらず、研究者個人の基準によって、各々が独自に調査しまとめているのが現状であり、これらの一覧に掲載されている機関のうち、どの機関までを文学館とするのか、明確に線引きすることは困難である。

こうした事情から、本調査においては、改めて論者の基準によって調査対象とする機関を選定することとした。その際の基準として、文学館の「図書館的機能」の実態を把握することが目的である本調査において、文学館の機能や活動に選別基準を設けることは適切ではないと考えた。そこで、本調査においては、機関の名称および、個人記念館の場合には主題としている人物の業績を判断材料として、前述の木原の「全国文学館等一覧」に掲載されている機関の中から、以下の2つの条件を満たす機関を調査対象とすることとした。

①機関名として「文学館」、「文学資料館」、「文学博物館」、「文学ミュージアム」、「記念館」の5つのうちのいずれかの名称を用いている機関

②①に該当する機関の中でも個人記念館の場合、主題としている人物の主たる業績が文学に関係していること。これは、「全国文学館等一覧」の中には、元内閣総理大臣である犬養毅を顕彰している犬養木堂記念館や、日本地図の作成に努めた伊能忠敬を顕彰している伊能忠敬記念館など、文学者と捉えることが難しい人物に関係する機関が多数掲載されていたためである。本調査では、小説家、随筆家、歌人、俳人など、文学に関する活動がその人物の主たる業績とされている者に関する機関のみを改めて選出した。

また、木原が本一覧を作成した後、論者の調査までの期間に閉館した機関は除外した。以上の条件を設けた結果、これに適合する機関として208館が抽出された。

つづいて、調査の手法についてである。論者は以下の2項目に関して、調査対象とした208館全てに対し、電話による取材調査を実施した。なお、調査の際は学芸員あるいはそれに相当する職員等に取材している。調査事項は以下の通りである。

①文学館活動における「図書館的機能」の有無について（調査においては、「図書館的

機能」の役割を担っているとされる、図書資料の閲覧提供活動が各館において実施されているか否かという点を質問事項とした。) )

- ② ①で実施していると回答した場合、どのような形態によって実施しているのか
- a) 図書閲覧室などの館内施設の有無
  - b) 対象者は研究者であるのか、あるいは一般来館者であるのか

以上が本論において整理・検討を進める文学館の「図書館的機能」の実態調査の概要である。この調査の結果に基づき、次章においてはその整理と分析を行っていく。

## 2. 文学館の閲覧提供活動の整理

### 2-1. 館内設置施設による形態の整理

前章において示した調査を経て、その結果を整理したところ、文学館において「図書館的機能」の役割を担っている、図書資料の閲覧提供活動は、提供される資料の性格および、閲覧対象者の種別によって、「専門図書館型A」、「専門図書館型B」、「図書コーナー型」、そして「展示活動のみで閲覧提供活動はおこなっていない」の4つの形態に分類することができた。まずはそれぞれの形態に関して以下にその傾向を示す。

#### ①専門図書館型A

館内施設として図書室、閲覧室など設置しており、その中で資料の閲覧が可能となっている。そこで提供される資料は、初版本や初出誌などの文学館の収蔵資料にあたるもので、主に学術研究を目的とした研究者や大学生、大学院生などが利用者として想定されている。機関によっては、そうした研究者や学生などを対象にレファレンス対応などの一般の図書館と同等のサービスも提供されている。ここでの閲覧提供活動は、研究者の学術研究活動に貢献することを目的としている。以上の活動内容は専門図書館のそれと同様であると判断されることから、こうした活動のタイプを専門図書館型とし、②に示す、もうひとつの専門図書館型の形態と区別するために、便宜的に「専門図書館型A」と呼称することとする。

#### ②専門図書館型B

①の専門図書館型Aと同様に館内施設として図書室を設置しているが、そこで提供される資料の性質と対象となる利用者が異なる。この専門図書館型Bの活動において提供され

る資料は、文学館の収蔵資料そのものではなく、閲覧用として別途、購入や寄贈によって用意された、現在、一般に流通している書籍である。資料の内容は、それぞれの機関が主題としている文学者の作品やその文学者の関連書籍となっており、それらを来館者が「読書」や「文学鑑賞」することによって、展示内容の理解を深めることや文学への関心を高めることを目的として提供されている。主として一般の来館者を対象としており、一般市民に対する教育普及と文学者および文学作品の顕彰や紹介が主たる目的となっている。

館内に図書館などの専用施設を設け、各機関の主題とする文学者の作品などを収集していることから、専門図書館的な性格をもっているが、対象者と、提供される資料の性質が①とは異なるため、この活動のタイプは「専門図書館型B」と呼称する。

### ③図書コーナー型

①や②のような図書閲覧の専用の独立した施設を館内に保有せず、展示室の一部分に図書コーナーを設けたり、休憩スペースやブックカフェなどの簡易的な空間を設けたりしてそれらの場において、各機関の対象とする文学者の作品などを手にとって読むことができるようにしている。そこで提供される資料は、②の専門図書館型Bと同様に閲覧用に現在流通している書籍から購入して用意したものであるが、専門図書館型Bほどに豊富に揃えられてはおらず、十数冊程度の機関もある。また館内施設の形態は異なるが、その活動の目的に関しては、専門図書館型Bと同様であり、一般来館者を対象とした、教育普及と文学者・文学作品の紹介・顕彰を目指している。

### ④展示活動のみで閲覧提供活動はおこなっていない

館内に来館者のための図書閲覧のスペースや閲覧用書籍を設けず、展示を主たる活動としている。すなわち、「博物館的機能」のみを果たしていることになる。

以上のように、論者による調査の結果からは、文学館における閲覧提供活動には、設置されている施設とそれらを利用する対象者に着目した際、以上の①から④の4つの形態がとられているということが明らかになった。さらに、これらの各形態に該当する機関の館数を整理したところ、①および②に該当する、閲覧室等を設けている機関は51館で全体の25%、③に該当する機関は63館（30%）、そして④に該当する機関は94館（45%）であった。すなわち、施設の設置面から見た際、展示のみを行っている機関が最も多く、調査対象とした機関のほぼ半数を占めており、反対に閲覧室等を設けて本格的に閲覧提供活動を行っている機関が最も少ないことが明らかになったのである。

またこれら4つの形態と、それぞれの活動を実施している機関の機関名との関係性を整理したところ、以下の表①に示す傾向が確認された。

表①

	①専門図書館型 A + ②専門図書館型 B	③図書コーナー型	④展示のみ
日本近代文学館など「文学館」を 機関名に用いている機関：71館	29館 (41%)	20館 (28%)	22館 (31%)
小泉八雲記念館など「記念館」を 機関名に用いている機関：123館	20館 (16%)	37館 (30%)	66館 (54%)
文学資料館・文学博物館・文学 ミュージアムなど、その他の名称 を用いている機関：14館	2館 (14%)	6館 (43%)	6館 (43%)

※表中の①～④は4-1.において提示した閲覧提供活動の4つの形態と対応

表①に示した通り、「文学館」を冠する機関においては、①と②を合わせた数で41%、④は31%、③は28%であり、館内に閲覧専用の施設を設けている専門図書館型の活動を行っている機関が最も多く、図書コーナー型と展示のみの活動を行なっている機関の数はほぼ同数であった。それに対し、「記念館」を冠する機関では、④が54%と最も多く、次いで③が30%、そして①および②が16%となっており、展示のみの機関が半数以上を占め、専門図書館型の機関は全体の4分の1にも満たない。そして最後に「文学館」および「記念館」以外の名称の機関を「その他の名称の機関」としてひとつにまとめると、それらにおいては、④と③が同数でそれぞれに半数近くを占め、①・②はわずかに2館のみという結果であった。

以上からは、機関の名称によって閲覧提供活動のあり方には明確に異なる傾向がみられるといえる。文学資料の散逸を防止するとともにそれらを研究者の閲覧に供することを目的に設立された日本近代文学館をはじめとする「文学館」と、「文学館」の名称を用いる機関が誕生する以前から設立がみられていた、文学者個人を顕彰することを目的とした個人記念館とでは、それぞれの機関の設立背景の違いから、閲覧提供活動に対してもその性質が反映されているのである。しかしここで注意しなければならないのは、今日の文学館研究においては、文学館全般に関して、閲覧提供活動が最も重要な活動であるとする認識が示されているということである。しかしこの調査結果からは、こうした見解を示す際には、「文学館」を冠する機関を主たる対象として議論することが妥当であると導けるだろう。仮に、記念館等も含めた全文学館に関する議論であるとする、文学館理念の理想と現実

には乖離があるといわざるをえないだろう。

## 2-2. 閲覧提供活動の目的とその形態の整理

前項において提示した、閲覧提供活動の4つの形態に関して、館内設置施設のあり方だけでなく、その活動目的をも含めて再整理すると、3つの形態にまとめることができると考える。すなわち、前項における①の専門図書館型Aは、主として学術研究者へ寄与することを目指していることから、その活動の目的は、「研究貢献型」であるといえる。また、②の専門図書館型Bおよび③の図書コーナー型は、施設の形態や規模は異なるが、対象とする利用者や提供される資料の性格、さらには閲覧提供活動によって目指す目的は同様に、一般市民への文学教育である。このことから、これら2つのタイプの活動は、「教育普及型」であるといえる。さらに、④に関しては、閲覧提供は実施していないが、あえて閲覧提供をしていないタイプ——すなわち「博物館的機能」のみを担っているということになるのだが——として類型するとしたら、このタイプの活動においては、文学者や文学作品の顕彰を目的としていることから、「文学（者）顕彰型」であるといえる。閲覧提供活動に関して、その活動の目的に着目すると、このように3つの形態が存在すると指摘することができるのである。

以上の3つの分類について改めてまとめると、以下のように示すことができる。

①研究拠点型：研究者や学生などを対象に、その調査研究活動に貢献することを目的に、特定の文学者や文学ジャンルに関する資料を集中的・網羅的に収蔵し、閲覧に供している。これには、4-1.における①専門図書館型Aが該当し、日本近代文学館、俳句文学館などのように研究者を対象とした資料の閲覧環境を有している機関がここに含まれる。

②教育普及型：一般来館者を対象に、文学作品や文学者の関係資料に楽しみながら親しんでもらえるよう、調査研究ではなく、「読書」や「文学鑑賞」、「文学作品や文学者の理解」を目的に、少量の関連書籍を所有し、閲覧に供している。これには、4-1.における②専門図書館型Bおよび、③図書コーナー型が該当し、館内の図書室においてそうした活動を行なっている世田谷文学館や、図書室よりも娯楽性の強い、ブックカフェや休憩コーナーなどの施設を有している機関など、一般来館者に向けた学習の場の提供、すなわち教育普及型の活動を主たる目的としてといえる。

③文学（者）顕彰型：閲覧提供活動は行わず、展示を主眼に、文学作品の世界観の提供や

文学者に親しみや関心を持ってもらうことを主たる目的としている。文学作品あるいは文学者の顕彰を目的としていることから、そのことを強調するためにあえて文学（者）とカッコ書きをつけた「文学（者）顕彰志型」と呼称する。これには、4-1.における④の展示のみで閲覧提供活動は行っていないタイプの活動が該当する。

このように館内施設の形態だけでなく、その活動目的をも含めて分類した場合には、文学館の閲覧提供活動は、以上の3つの形態に整理することができる。また、この3つの形態に対しては、研究拠点型には前項における①の専門文学館型Aが該当し、②の教育普及型には、前項の②の専門図書館型Bおよび③の図書コーナー型が、そして③の文学（者）顕彰型には、前項の④の展示活動のみで閲覧提供活動は行っていないものがそれぞれに該当するといえる。

以上のように、文学館の「図書館的機能」の実態調査の整理・分析から、館内施設の面では4つの形態を見いだすことができた。またこれら4つの形態について、それぞれの担っている役割に着目してさらに整理を進めると、最終的には3つの形態が存在すると示すことができるのである。

### 3. 文学館の分類に関する整理

前章における、館内施設および活動目的に着目した、閲覧提供活動の分析からは、最終的に、文学館の「図書館的機能」を視点とした分類として、「研究拠点型」、「教育普及型」、「文学（者）顕彰型」の3つの形態に整理することができたのだが、文学館の分類に関しては、第1章において取り上げたように、すでに2001年に生田美秋が、収蔵資料の主題に着目して、「個人文学館」、「総合文学館」、「専門文学館」という3つを提示している。これらの分類について改めて詳述すると、「個人記念館」とは、特定の文学者や文学作品を主題とした機関とされており、また「総合文学館」は、神奈川県立神奈川近代文学館や世田谷文学館など、その機関が立地する地域にゆかりのある文学者やその作品を主題とした機関とされている。そして、専門文学館は、日本近代文学館や俳句文学館など、特定の文学ジャンルに関係する文学者や文学作品を主題とした機関とされている。

以上の生田の分類は、各文学館の主題を視点とした館種分けであるのだが、それに対し、本論が示したものは、「図書館的機能」の目的を視点として分類したものであり、それぞれのカテゴリーに分類される機関が、若干異なってくる。たとえば神奈川県立神奈川近代文学館や鎌倉文学館のように、生田の分類においては「総合文学館」に分類される機関であっても、文学館の「図書館的機能」に着目すると、高度な専門書を有し、レファレンス対応など研究者に向けた研究機会を提供するなど、専門図書館と同様の活動——すなわち、研究拠点型の活動——を行なっている機関も存在している。また、「個人文学館」に分類されている機関をみていくと、北九州市立松本清張記念館のように、松本清張研究の拠点として、「専門文学館」と同様に資料の収集と閲覧提供を重点的に実施している機関も存在しており、こうした機関は「図書館的機能」を視点とした本論の分類においては全て研究拠点型に該当するといえる。

すなわち、生田の示す3つの分類のうち、資料の閲覧提供活動を主たる目的として設立された「専門文学館」は論者の示す分類においてもすべて「研究拠点型」の機関として重なり合うが、総合文学館と個人記念館に関しては、それぞれにおいて、「研究拠点型」、「教育普及型」、「文学（者）顕彰型」の3つの形態の機関が含まれていると整理することができる。こうした生田の分類と論者の分類との関係性は、以下の図1および図2のように示すことができる。

図1.

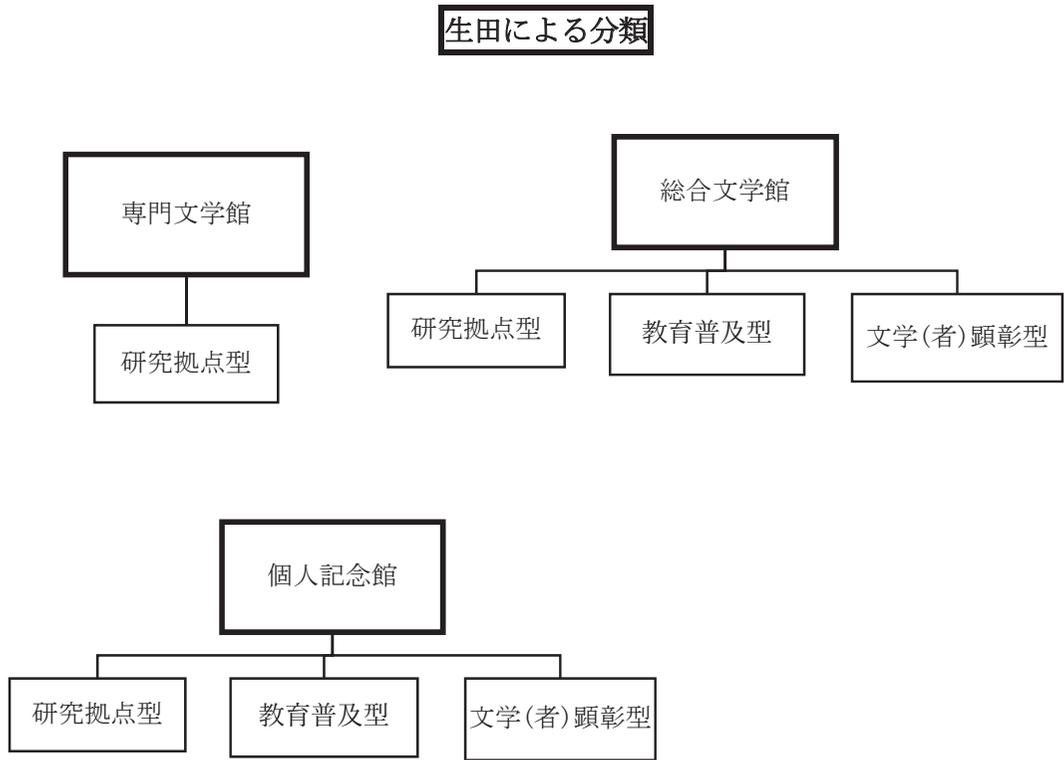
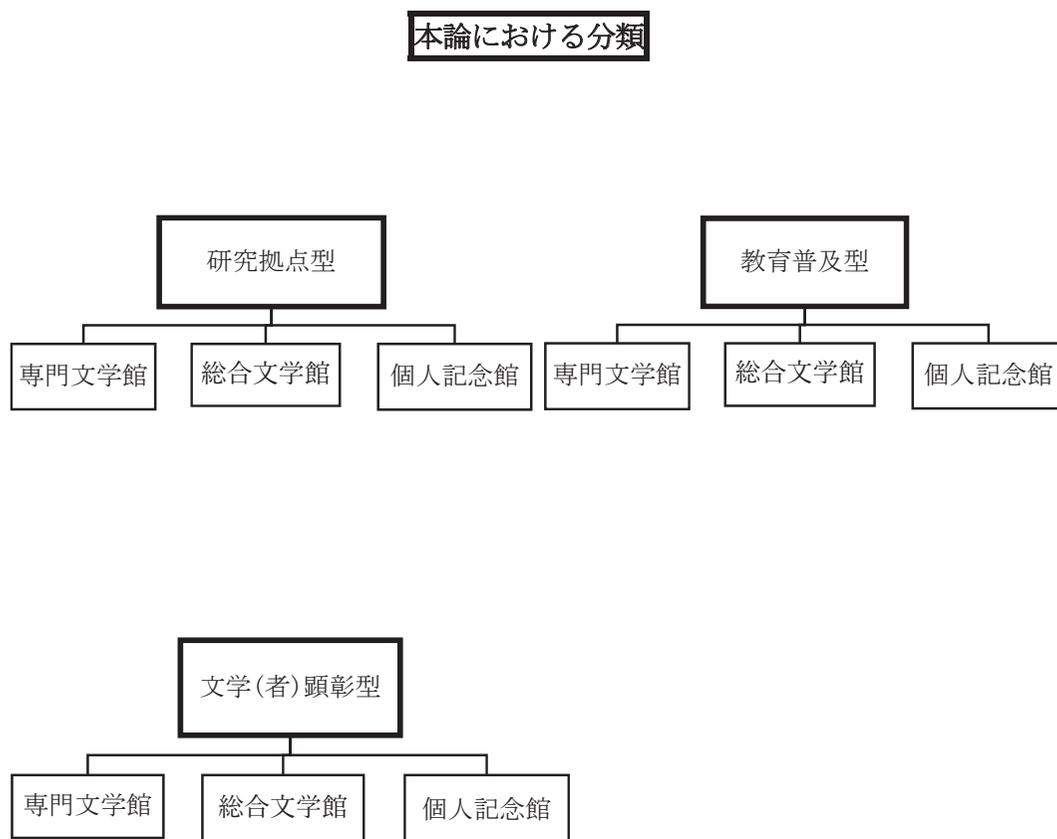


図 2.



以上の図 1 に示したように、生田による文学館の 3 つの分類のうち、総合文学館と個人記念館についてはそれぞれに対して、「研究拠点型」、「教育普及型」、「文学（者）顕彰型」の機関が含まれており、異なる目的の「図書館的機能」を担う機関が存在していることが示される。生田の分類では、総合文学館は、地域の文学活動の活性化や、教育普及活動を中心とした活動を展開する機関とされており、個人記念館は、展示活動を中心として文学者個人の顕彰を行う機関とされていたが、「図書館的機能」に着目した上で改めて分析してみると、総合文学館や個人記念館の中にも専門文学館のように「研究拠点型」の「図書館的機能」を有している機関や、個人記念館であっても「教育普及型」の「図書館的機能」を有している機関が存在していることが示される。すなわち、「総合文学館」および「個人記念館」については、「図書館的機能」の目的を視点とした際、異なる 3 つの形態の機関が構成要素となっているという関係性を見出すことができるのである。

反対に、図 2 に示すように、本論の提示する分類においては、「研究拠点型」、「教育普

及型]、「文学（者）顕彰型」のそれぞれに、「個人記念館」、「総合文学館」、「個人記念館」とが併存することになるが、「研究拠点型」、「教育普及型」、「文学（者）顕彰型」の各分類において、担っている「図書館的機能」の傾向が統一されることになる。そのため、たとえば「研究拠点型」の機関は、専門図書館としての機能を担っている、などと3つの館種それぞれにおいて一定の機能を見出すことができるのである。従来の分類においては、収集する資料の主題を視点としていたことから、たとえば「個人記念館」に該当する機関の中に、「研究拠点型」や、「教育普及型」の「図書館的機能」をもつ機関も含まれており、その結果、第1章において取り上げた、中村、生田、豊泉の見解にみられるような、文学館はどの機能を重視すべき機関であるのかといった議論につながっていったのではないかと考える。それに対して本論の提唱する分類においては、それぞれの分類の中では、各館の担っている機能の傾向が統一されることとなる。したがって、この分類を視点とした際には、「研究拠点型」、「教育普及型」、「文学（者）顕彰型」のそれぞれに分類されている同一形態の文学館同士を比較して、「図書館的機能」を重視すべきか否かといった議論はなされなくなると考える。

このことはまた、他の学問領域から文学館を捉えようとする際においても、従来のようにひとつの館種の中に異なる機能の機関が含まれていた分類を視点とするよりも、一定の統一された機能を見出すことができるため、文学館の機能や位置付けの見通しを立てやすくなるのではないかと考える。

もちろん、「図書館的機能」に関して一定の傾向を見出すことができるとはいえ、本論の示す分類を用いることによって直ちにこれらの課題が解消されると言い切ることはできない。また本論は従来の生田の分類を否定するものでもない。

今後の文学館研究においては、生田の分類とともに本論の示す分類も用いることで、文学館の機能や位置付けを見いだそうとする際により明確にそれらを捉えていくことが可能となるのではないだろうか。

## おわりに

本論においては、文学館の活動のうち、「図書館的機能」を担っているとされている、図書資料の閲覧提供活動の実態調査に基づき、文学館の「図書館的機能」の再整理を行った結果、新たに文学館の3つの形態を見いだすことができた。収集資料の主題を視点とした従来の生田の分類とともに、本論の示す、「図書館的機能」の目的を視点とした分類もまた、文学館の機能や位置付けの整理に際して役立つものとなると思う。今後、文学館

研究が構築されていく上で本論がその一助となれば幸いである。

## 註

- 1 種井丈「文学館論史」、『博物館学史研究事典』、雄山閣、2017、p 242
- 2 木原直彦「全国文学館等一覧 2017年改訂版」、『全国文学館協議会会報』第69号、全国文学館協議会、2017年10月、p 16-38
- 3 「会則」第3条、『全国文学館協議会会報』第1号、全国文学館協議会、1996年6月、p 115
- 4 註1に同じ
- 5 豊泉豪「総務に関連して検討すべき事項について」、『全国文学館協議会会報』第1号、全国文学館協議会事務局、1996年6月、p 94
- 6 この点については、日本現代詩歌文学館の豊泉豪が、以下のように述べていることに示されている。現状ではそれぞれの館によって事情がまちまちで一概には言えませんが、文学館の機能は大きくは社会教育施設（観光施設であることも含めて）としての博物館的機能と、研究施設としての専門図書館的機能の二つに分類されると思います。  
(豊泉豪「総務に関連して検討すべき事項について」、『全国文学館協議会会報』第1号、1996年、p 94)
- 7 中村稔「〈連載〉随想——文学館学序説のエスキスのために（3）」、『日本近代文学館』第167号、日本近代文学館、1999年1月、p 1
- 8 岡野裕行「文学館の検索システムの現状と課題」、『情報メディア研究』第7巻第3号、情報メディア学会、2009年3月、p 42
- 9 岡野裕行「「図書館としての文学館」試論——文学研究の確立とウェブの活用構想——」、文学館研究会、2009年2月、p 2
- 10 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典 第4版』、丸善出版、2013
- 11 『日本近代文学館ニュース』第7号、日本近代文学館、1965年8月20日、p 2
- 12 伊藤整「予想以上の進展」、『日本近代文学館ニュース』第1号、日本近代文学、1963年1月10日、p 3
- 13 『図書館雑誌』昭和43年2月号、日本図書館協会、1968年2月
- 14 大久保乙彦「私たちの新しい図書館 財団法人日本近代文学館」、『図書館雑誌』昭和43年2月号、日本図書館協会、1968年2月、p 28
- 15 中村稔「〈連載〉随想——文学館学序説のエスキスのために（3）」、『日本近代文学館』第167号、日本近代文学館、1999年1月、p 1

- 16 『全国文学館協議会会報』第29号、全国文学館協議会、2005年6月、p 35
- 17 生田は、文学館を収集資料の主題の相違点に着目して、大きく3つの形態に分類している。1つ目は、特定の文学者や文学作品を主題とした「個人記念館」、2つ目は、施設の立地する地域にゆかりのある文学者を全般的に扱う「総合文学館」、3つ目は、施設の立地する地域に関係なく、また特定の文学者も設定せず、ある文学ジャンルに関係する文学者の資料を網羅的に扱う「専門文学館」である。(生田美秋「博物館としての文学館 「随想——文学館学序説のエスキスのために〈総務篇〉」について」、『全国文学館協議会会報』第18号、全国文学館協議会、2001年9月、p 34より要約)
- 18 生田美秋「博物館としての文学館 「随想——文学館学序説のエスキスのために〈総務篇〉」について」、『全国文学館協議会会報』第18号、全国文学館協議会、2001年9月、p 34
- 19 豊泉豪「随想——文学館学序説のエスキスのために〈総務篇〉」を読んで——博物館としての文学館——」、『全国文学館協議会会報』第18号、全国文学館協議会、2001年9月、p 31
- 20 駒見和夫「文学系博物館小考」、『和洋國文研究』第40号、和洋女子大学、2005年3月、pp67-76
- 21 同上、p 67
- 22 岡野裕行「文学館の検索システムの現状と課題」、『情報メディア研究』第7巻第3号、情報メディア学会、2009年3月、pp41-61
- 23 同上、p 41
- 24 中沢弥「文学館雑観」、『昭和文学研究』第60集、昭和文学会、2010年3月、p 108
- 25 註2に同じ
- 26 岡野裕行「文学館一覧」、文学館研究会 HP (<https://hiroyukiokano.wixsite.com/literarymuseum/blank-51>)